



〈R08200062〉

注意事項

1. 問題冊子および解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
2. 問題は2～9ページに記載されている。問題冊子や解答用紙の印刷が不鮮明であったり、ページが抜けていたり、汚れていたりしている場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 受験番号および氏名は、試験が始まってから、解答用紙の所定欄(2か所)に正確に、いいねいに記入すること。
読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

5. 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示がでたら、ただちに筆記具を置くこと。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章は山本夏彦のエッセイ集『日常茶飯事』の解説である。これを読み、あとの問いに答えなさい。

本書の元本が出たのが一九六二年、著者が亡くなられたのが昨二〇〇二年。その間、じつに四十年もの年月が経過している。

本書を手にとって読みはじめた山本夏彦の読者は、この事実にも二つの点で驚くにちがいない。

一つは、山本夏彦は四十年前から死の直前まで全然変わらなかった、というよりも、まったく同じだったということ。つまり、本書は、絶筆として出版された二つのエッセイ集に書かれていることと、基本的には寸分違わぬことを言っているのだ。

もう一つは、それにもかかわらず、本書は、山本夏彦のエッセイを読み慣れた読者にとっても新しい感じがするということ。

この二つの絶対矛盾する印象はどこからきているのだろうか？

それは、山本夏彦の文章に漂う「既視感」²ならぬ「未視感」が原因なのではないだろうか？ 「既視感」(デジャ・ヴュ)というのが、まだそれを見たことがないのを知っているのに「これはどこかで見たことがあるぞ」と感じる感覚であるとすれば、私がいま「未視感」と名付けたものは、それと反対の感覚、すなわち、これはすでに見たことがあると知っているのに、「こんなものはまだ見たことがないぞ」と思ってしまう感覚である。

では、この「未視感」はどうやって生まれるのか？

それを解く第一の鍵が、この『日常茶飯事』には隠されている。

「日記のすすめ」というエッセイの次の一節。

「故人横光利一⁴は、弟子たちに、随筆は書くなといましめたという。せつかく小説になるものを随筆にしてしまつては損である。小説家たるもの、随筆なんか書いてはいけない、書くなら小説の余りか、かす⁴で書くと教えたという。

『けちのいろいろ』という文章を、そのうち私は、日記のなかに書こうと思う。横光のけちはその一つで、作者として徹底しているとも言えようし、創造力の貧困とも言えよう」

この「けちのいろいろ」というアイデアについては、「自ろう車」というエッセイでさっそく使われている。すなわち、当時はやりの流線型やモダン・リビングにおける動線の儉約の問題について、これを「けちのいろいろ」の一つに数え、そうした功利主義とは逆のむだの効用を説いているのだが、しかし、その先の展開を追って行くと、なぜか、論旨はその反対になってくる。なんのことかといえ、文章は、流線型や動線などの物質上のけち(創意工夫)を難じる一方、精神上のけち(創意工夫)を顕揚する(正確にはその不可能性を示す)方向へと向かうのだ。

「現代人がメカニズムを信じ、これを崇拜するにいたつたのは、それが財産として残せるためである。ひとたび電燈を發明すれば、子孫は行燈の昔にもどることがないからである。

一方、精神上的の遺産は、子孫に残せない。老荘儒仏ヤソにいたるまで、聖賢は人類を精神の内奥から救おうとした。なん千年来試みて、成功しなかったのは、五十にして天命を知った賢人が死んでしまえば、I、その子は初めからやり直さなければならぬ。やり直して五十になつても、はたして親父の域に達するかどうかはおぼつかない。

すなわち、精神上的の財産は残せないのである」

こうしたベシミスティックな言葉とは裏腹に、実際には山本夏彦はこの甲斐なき努力にこだわった。では、山本夏彦が、あえて不可能を承知で残そうとした精神上的の財産（創意工夫^⑤けち）とはなんなのか？

それは文字通り、観念（イデー）をけちること、無限に流通しているかに見える観念を共通項で次々にくくって行って、その数を減じ、必要最低限の数にまで限定してみせることである。a bとb aはまったく正反対に見えても因数は同じ、a b cとd e fは因数のアルファベットは異なっているてもその数は同じというように、この世のもろもろの事象・現象・観念・思想を同一のものとして裁断することである。

こうした山本夏彦一流の「精神上的のけち」が色濃く出ているのが、倒産しかけたレコード会社社長として乗り込んで、いかに国民全員にレコードを一枚ずつ売るか、その方法について一席ぶつという仮定の「就任演説」の次の言葉である。

「言論というものは、人が信じているほど変化あるものではありません。（中略）

ついこの間まで、我々は醜の御楯であり、撃ちてしまむと言っていたものです。大臣の演説も、隣組長の演説も、寸分たがわなかったことはご記憶でしょう。（中略）

その冗漫を去れば、説教のすべては一に帰します。今や民主主義、やがて共産主義の天下だといわれています。両陣営の二大紋切型を、ダイジェストしてレコード化するのが、社員諸君のこれからの仕事であります」

山本夏彦「社長」は、さらに論を進め、同じなのはイデオロギーだけではなく、男女の愛の言葉もすべて似たようなものだからレコード化は十分可能だと説いて、こう結論する。

「けれどもそれ（犬の鳴き声）は五十種を出ません。人類は、それを犬が人より劣った証拠だとみなしてきましたが、我々の言論も、むろん五十以内に整理できます。犬ですでに整理され、我々ではまだされていないからといって、それを高等だと思ふのは身最眞にすぎません」

この「言論五十種限度説」は、山本夏彦の持論、というよりも究極の認識だったらしく、「インテリ」というエッセイでも、「五十語限度説」として使われている。

「いつの時代でも、この五十語さえマスターしていれば、脳ミソはいらないのである。しかも人はなお自分の脳ミソの主人公は、ほかならぬ自分だと思ひこんでいる。自分で考え、自分で発言していると思っているが、とてもこの五十語を出ることはできはしない。生まれて、喋って、そして死ぬのである。

今までもそうだった。これからも、そうであろう」

ところで、われわれが目すべきは、この「言論五十種限度説」は、山本夏彦の認識であると同様に方法でもあったということである。すなわち、彼は、人間の思想・認識、さらには言語ですら、ギリギリにまで凝縮していけば、五十種類にまでなるとしたばかりか、表現においても、この五十種類を順列・組み合わせするだけで十分と考えたのである。

山本夏彦のエッセイで言われていることは基本的に、この『日常茶飯事』から始まって遺作まで全部同じという我々の第一の印象は、まさにここから来ているのである。

そればかりではない。先に指摘した「それにもかかわらず、本書は、山本夏彦のエッセイを読み慣れた読者にとっても新しい感じがする」という第二の印象も、この「言論五十種限度説」によつ

ている。つまり、山本夏彦のエッセイは、それが五十以上の思想・認識は述べていないと分かっている。その順列・組み合わせが無限だから、常に新しい感じがするのである。

左右両派のイデオロギーや男女の口説き文句は、一見どれほど新しく「未視」のように見えても、五十種類の言論をさして工夫せずにそのまま使っているから、われわれは、「はてこれはどこかで見たことがあるぞ」という「既視感覚」に襲われる。

反対に、山本夏彦のエッセイは、初めから「既視」で五十種類のどれかとわかつていながら、いざ読むと、「はてこんなものは一度も読んだことがないぞ」という「未視感覚」を感じてしまうのである。

本書は、以後四十年間にわたって、無限のバリエーションで同じ思想・認識を伝え続けた山本夏彦が、その原型たる五十種類の思想をはっきりと示している唯一の本なのである。

(鹿島茂の文章による)

問1 傍線部1「山本夏彦は四十年前から死の直前まで全然変わらなかった、というよりも、まったく同じだった」とあるが、筆者は何が「同じだった」と述べているのか。「〜こと」に続く八十五字の箇所を本文中から探し、その始めの五字を抜き出して答えなさい。

問2 傍線部2「既視感覚」の具体例として適切でないものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 両陣営の二大紋切型 イ 男女の口説き文句
ウ 大臣の演説 エ ペシミスティックな言葉

問3 傍線部3「この「未視感覚」はどうやって生まれるのか？」とあるが、筆者は「未視感覚」が「どうやって生まれる」と述べているのか。最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 五十種類の思想・認識をベースに、自由に新しい表現を模索することから生まれる。
イ 思想・認識の冗漫を去って、五十種類に整理したものをマスターすることから生まれる。
ウ 五十種類に限定された思想・認識を、無限の順列・組み合わせで述べることから生まれる。
エ 無限に流通する思想・認識の数を減じて、順列・組み合わせを工夫することから生まれる。

問4 傍線部4「横光利一」の作品でないものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 日輪 イ 羊をめぐる冒険 ウ 春は馬車に乗って エ 機械

問5 傍線部5「精神上のけち(創意工夫)」とはどのようなことか。それを述べている三十五字の箇所を本文中から探し、その始めの五字を抜き出して答えなさい。

問 6 空欄

I

に入るべき慣用句を次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 帯に短し襷たすきに長し イ 灯台もと暗し
ウ もとの木阿弥 エ 五十歩百歩

問 7 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

(二) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

セッターの自分は、幼少期から多大なる時間を、体育館ですごしていた。だから、体育館にいると自分が落ち着くのがよくわかった。

セッターの自分は、運動しているときに限り、他人の体調や性癖がわかった。自分の体調のきわめてよいときに限り、球がフルーツにみえる。それはしかしスパイクを打つ者の実力に伴う、逆行的なものではないのだろう。ようするによいトスからよいスパイクがきまった瞬間をおもいだすとそう見えているようにおもいだす。かすかなる柑橘系^{かんきつ}のにおいがし、いま、ボールが林檎^{りんご}だったな、とか、いまは葡萄^{ぶどう}だったな、とかおもう。発想がファンシーすぎることは自覚しているので、そのことを自分以外の人間にはなしたことはない。季節は晩夏。三年生が引退したいま、のこりすくない夏休みを部活^{ぶくわく}にツイやし、二組の練習試合で新チームのポテンシャルを試している。

セッターの自分と二年のエースが同チームに入ると監督が告げたとき、チーム全体から無言の抗議、のようなザワめきが走った。新チームのなかで自分と二年のエースだけが中学からの大会経験も豊富で、「勝つことをしている」のだから、その抗議は正当なものといえた。

自分はキャプテンでもあった前セッターとのレギュラー争いにやぶれ、高校ではまだあまり試合に入れていない。前キャプテンは、自分に「あいつのこと、たのむわ」といった。

「あいつって、だれすか?」

「わかってるだろ」

とって前キャプテンが目でしめした人物が、三回戦敗退にくやしそうでもなく、うちわで後輩に扇^{あふ}がせながらゆうゆうとドリンクをのんでいた、インターハイの予選会場に立つ二年のエースだった。

一年のセッターに、二年のエースキャプテンのことを「たのむわ」とはどういうことか。しかし前キャプテンの人は、こうしたことにゆえんがある。人心掌握に長^たけている。それは人のきもちがわかる、ということとは似て非なるものだった。

カリスマが抜けると、組織はかならず一瞬は纏^{まと}まるが、その後どこまでも弛緩^{しじゆん}する。この手つづきを経^たないことに、チームはもうひとつの人格をもちえない。第八のチームメイトたりえない。適切な人格形成をなしえなかったチームはどんなにすぐれた才能が集まっても敗^まける。チームがもうひとつの選手としてはたつき、構成員が増減する。それがチームスポーツのゆるぎない掟^{おきて}だ。ふたりに闘っているような感覚のときもあれば、十人もコートにいるような感覚のときもある。われわれはもうゆるんでいた。しかしあまりある跳躍の天才をもった、二年のエースに上げるに限って、自分のトスは冴^さえわたる。チームバランスを考慮して、レシーブ強化が課題とされる一年を中心に、Aチームは組まれた。セッター不動の位置にパスが入ることの期待できない面子^{めんつ}なのだから、プロックを三枚つかれたらエースとで一発ではきめられないだろうし、ちゃんと打てるボールをあげられるかもあやしい。しかしこの情況だからこそ、俄然^{がぜん}燃える自分がいた。サーブが入り、

A

一步二歩踏み込む位置にレシーブがあがり、エースが手をあげて呼んでいた。からだ

のジクが斜めに折れる、不自然な体勢から力を膝にくすぶらせ、左腰を支点に(支点はあげるトス

の高さ、^③キョリ、角度、レシーブの精度、チームひいてはゲームの態勢において **B** 変える、それが自分のスタンス)、ロングボールをエースにあげる、その一瞬に自分は魂の仮象を捧げ^捧る。

しかし、惚れ惚れするほどの跳躍で打ちつけられたエースのスパイクが向かった先は自分の顔面だった。

チームはソウゼン。^④

自分は視界が消え、つーんの感覚が鼻を中心に下半身にまで及んだ。

顧問はパイプ椅子から転げた。

自分には、自分のあげた最高な斜めパスが、二乗されつづけるような力の作用で重たく自分の顔面に戻り、弾け、あふれる果肉の混ざったような鼻血が、体育館の木板にポタ……ポタ……おちては弾ける、火花がただしく目に映った。ワックスをかけられたの表面に血滴はういて、にわか泳いでいる。

「おまえのトスってマジで不快」

打たされてる感マンマン、かん違いしてんじゃねえの？ 傲慢なんだよ、もうワンプレイに一回しか打たねえ、おまえのクサったトスは、^⑤といった。

労りに集まるチームメイトの「だいじょうぶ？」に混ざって、自分は「……ハイ」と返事した。ボンボンこもるのに、**C** ひびく自分のこえ。

——中略——

男子バレー部二年のエースにして、春からライトとセンターを局面に応じてつとめあげ、この夏からレフトにうつった新チームのキャプテンでもある自分は、ふくらはぎのムズムズするような感覚をもてあましつつパンを噛んでいた。

味もなにもない。

跳びたい！

の気分でいっぱいだった。脚が貧乏揺すりをつづけている。自分にもそれが止められない。

それでもあの新セッターのトスに跳ばされるのはいやだった。

校庭ではサッカーやダンスやキャッチボールに興じる生徒の頭部がうごめいていた。強風に吸い込まれるようにカーテンがばさばさ吹き込んでくる。かれらは部活に所属していないのだろうか？ 自分は部活に備えて体育もこなす程度、いつでも本気で動かないようにしていた。きゆうに動くからだがビクビクする。缶ペンを落としても、**D** 捨うのがエースの自覚であり、いつなんどきもからだを労る自分という人格だ。

あの一年セッターとは「^③きもちがつうじている」。

その感覚が自分をイラつかせた。先輩でキャプテンでもある先セッターにたいして自分は、「きもちを預けていた」。だから怪我をするきがしなかった。先輩が自分を怪我させるとおもえなかった。だからおもいきり跳べた。結果的に膝も腰もまったく傷まなかった。

その信頼を補強せんと、せっせとメンテナンスにいそしんでいた自分がいた。それは認めざるをえない事実なのだろう。ようするに「先輩が自分を傷めるはずない」という仮説を拡張するように、自分はせっせと自分のからだを調べていたのだ。念入りにストレッチし、アップもクールダウンもだれよりも集中した。

あの一年のあげるトスの「なんでもわかる」感はずげーきもちわるい。

それは、二年の新エースとしての「わかっている感」をくすぐる。ほんとうには、わかっている感を感じているのは自分のほうなのかもしれない。このチームのこと、自分でもコントロールできない新エース特有のプライドのこと。そう、ある役割に応じて発生するプライドを、だれもコントロールすることなんてできない。振り回されるしかないものを、むりに飼い慣らそうとするから、自分ともチームとも不和をうんでしまうのだ。だからあれはあれでよかった。へんなオーラをまとう一年の才能あるセッター、人当たりもよく、他人の傷みがわかる。そんな人間のあげるトスが「わかって」自分はきもちがわるい。このわかっている感、「スポーツマンシップ」「フェアプレー精神」、そのようなダサイことばに代表されるような、運動をする者どうしの共有域を暗に強要されるような、強奪されたかのような「スポーツマン」の領域で繋がっている、繋げさせられている「自分たち」だからこそ、お互いをわかっているような心持ちで……

ほんとうは、放課後に「アისくいいこーぜ、おこつてやる」「やったぜ！ さすが先輩！」とかいいあいたいきもちで、自分は一年セッターにスパイクを叩き込んだのかも。

ぬくい先輩風を吹かせるような、気の利いた後輩へのやさしい歓迎として……

貧乏揺すりは加速。跳びたい。跳ばないまでも、はやく部活いきたい。

(町屋良平「スポーツ 基礎と応用」による)

問1 傍線部1「それはしかしスパイクを打つ者の実力に伴う、逆行的なものでしかないのだろう」とはどのようなことを述べているのか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア スパイクが決まらなかった場合、それをおもいだす記憶の中で、球がフルーツとは別のものになるということ。

イ よいトスからのよいスパイクをおもいだす際、記憶の中で球がフルーツになっているようにみえるということ。

ウ 実力のない者が打ってスパイクが決まらなかった時、フルーツのにおいは再現されないといいこと。

エ 実力のある者が打つスパイクは、ないものが打つ場合よりも大きなフルーツにみえるということ。

問2 傍線部2「チームはもうひとつの人格をもちえない」とあるが、「もうひとつの人格をも」

つとはどういうことか。最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア カリスマの抜けた穴を他の選手が交代で埋めること。

イ すぐれた才能を集めて纏まった組織になること。

ウ エースの天才をチームの全構成員で生かすこと。

エ チームがもうひとつの選手としてはたらくこと。

問3 空欄

A

D

に入るべき語句を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア ゆうゆうと

イ しなやかに

ウ ふしぎに

エ かるうじて

問4 傍線部3 「きもちがつうじている」について具体的に述べている一文を本文中から探し、そ

の始めの五字を抜き出して答えなさい。

問5 傍線部4 「あれでよかった」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (2)(1) 「あれ」とは何か。「〜こと」に続く二十字以内の箇所を本文中から抜き出して答えなさい。
「よかった」とあるが、それはなぜか。本文中の語句を用いて五十字以内で答えなさい。

問6 傍線部①〜⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

〔以下 余 白〕

